

深圳日本人学校における学校図書館整備への取り組み

～児童生徒が集い、価値ある学校図書館づくりを目指して～

前深圳日本人学校 教諭

北海道目梨郡羅臼町立春松小学校 教諭 住野谷 彩

キーワード：在外教育施設、学校図書館、読書活動、司書教諭、保護者ボランティア

1. はじめに

学校の中心にあるガラス張りの部屋。場所は一等地なのに、なぜかいつも閑散としている。それが本校の学校図書館であった。

日本とは異なる環境で暮らす子ども達にとって、学校図書館は日本語の書籍に親しめる唯一の場所だといっても過言ではない。そして、母語である日本語をより豊かで、確かなものにしていくためには、授業における学校図書館の活用も重要な課題である。児童生徒が訪れない学校図書館をどのように生まれ変わらせていくのか？本を借り・返してはまた借りるといふ好循環をどのように生み出していくのか？学校図書館をよりよく変えていくことによって、児童生徒の中に読書活動はどの程度根付いていくのかを調査・研究するために、『学校図書館改造プロジェクト』に取り組むこととした。

2. 深圳日本人学校の概要

経済発展著しい中国。その中でも、経済特別区として特異な発展を遂げてきた深圳市に所在している本校は、世界で88番目の日本人学校として2008年に開校した。当初の児童生徒数は36名であったが、創立10年目を迎えた現在では300名にせまる中規模校へと変化しつつある。『深圳速度』と呼ばれる目を見張るようなスピードで開発が進み、大きなエネルギーに満ち溢れている街。ここに暮らす子ども達を真の国際人として、心身ともにたくましく生きていくことができる日本人を育成するために、「国際社会において、心身ともにたくましく生きる児童生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、その具現化を目指しながら教職員一丸となって日々の教育活動に取り組んできた。

グローバルな視点で物事をとらえ、国際社会で通用するスキルを磨いていくためにも、自らの考えを生き生きと表現できる自己表現力と言語力を身に付けていくことは必要不可欠である。しかし、母語である日本語で自らの考えを自在に表現するという点においては大きな課題が見られていた。これには、限られた言語環境の中での生活や読書量の少なさが起因していると考えられた。自主・自立的な読書習慣を確立することで、児童生徒に確かな日本語力を身に付けさせていくことができるのではなかろうか。そして、その中心を担えるような学校図書館づくりが求められているのではなかろうか。そう考えながら、暗くて閑散としている学校図書館の整備を進めていくこととした。

3. 学校図書館改造プロジェクト

(1) 2014年度までの実態

派遣1年目の10月、前任者の帰国に伴い急遽図書担当を任されることとなった。当時の図書室は、児童生徒からも教職員からも「暗い」「雑然としている」「閑散としている」といったような負のイメージしか聞こえてこないようなものであった。担任をしていた小学部第5学年の児童の様子を見ていても、意図的に連れて行かなければ本を借りるといふことはおろか、読書の習慣さえ無い状態であった。

図書の担当になり最初に行ったことは、利用状況調査と蔵書確認であった。図書委員会が貸し出しを行っている2・3校時の休み時間と昼休みには、「何人が訪れ、どんな本を借りているのか？」という視点で児童生徒の観

察を行うことにした。放課後には、「どんな本が、どの程度そろっているのか？」という視点で蔵書の傾向をつかむことにした。3週間ほど続けたところでおおよその実態を把握することができ、いくつかの課題が浮き彫りになってきた。その中でも、新刊が定期的に入らず、学校図書館の雰囲気代わり映えがしないため、訪れるのは決まった数名の児童のみであるということは大きな課題の1つであった。そこで、この課題の解決を目指し、派遣2年目となる2015年度からは『学校図書館改造プロジェクト』を本格的に始動させることとした。

(2) 2015年度からの取り組み

①学校図書館運営計画の策定

2015年度のスタートにあたり、新たに「学校図書館運営計画」を策定した。発達段階に応じて目標を立て、その達成に向けた学校図書館づくりを行っていくことを目指した。年度当初には、全学級に対しての図書館オリエンテーションを行い、すべての児童生徒に新年度1冊目の貸出を行った。その際には、利用のきまりや本の借り方・返し方の確認はもちろんのこと、図書館クイズやブックトークをしながら、読書以外での楽しみ方や新たな活用方法についても提案した。2015年4月（オリエンテーション後から貸し出しを開始）の貸出総数は691冊（オリエンテーション時の貸出は除く）に上り、それまでの月平均318冊の2倍以上となった。オリエンテーション終了後の約2週間、短期間での貸出にも関わらずその総数が伸びたという点は、大きな成果と言える。

②「図書の時間」の新設

日本語力の育成と読書習慣の確立を目指して、小学部第1・2学年国語科の内1時間を「図書の時間」として扱うこととした。それに伴い、小・中学部全学級の使用割り当て表を作成し、運用を開始することとした。

「図書の時間」は手探り状態でのスタートであった。日本語を話す・聞く力に大きな差が見られる1年生の児童でも楽しんで参加できるような方法を探り、試行錯誤を重ねていった。時数を重ねるごとに、自分で本を探して借りて読むというサイクルが定着し、読書を通じた交流の輪も広がっていった。毎時間のはじめに教師が行っていた本の読み聞かせや紙芝居、パネルシアターなども、1年後には児童同士で自発的に行えるようになり、互いに発表し合う姿も見られるようになった。

③読書環境の整備

ア 配架方法の変更

入荷時期に合わせて順次配架していた従前の方法から、日本十進分類法による並べ方に変更した。これは、年々増加する蔵書数に対応するだけでなく、児童生徒自身に本を選択する力や必要な情報を見つけ出す力を身に付けさせたいというねらいによるものであった。

2012年の新校舎移転時にすべての書架が建付けられた本校の図書室では、蔵書と書架との間のアンバランスが生じていた。特に、文庫等の小型本を収納できる書架は無く、無駄なスペースがたくさんある状態であった。そこで、2本の柱の周りに新しい書架を増設し、小型本の収納スペースを設けることを提案した。管理職・事務局・理事会の承認が得られ、2015年の後期にはオーダーメイドの新しい書架が設置されることとなった。現在では、大きな柱は掲示板となり、柱周りの書架は日本の年中行事を知らせるためのスペースとして年間を通して広く活用されている。



柱周りを利用した
新しい書架

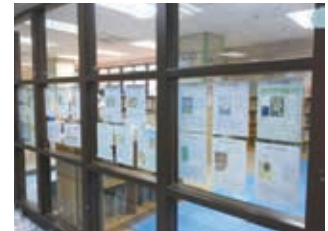
イ 学年文庫の充実

小学部の教科書改訂を受けて、学年文庫の充実を目指すこととした。まずは、第1学年から第6学年までのすべての教科書に目を通し、推薦図書一覧表を作成した。それを各学級担任に配布し、児童と共に探してもらう活動を行った。これにより、児童には本を見つけ出すことの楽しさを、教職員には学習に活用できる本の存在を知らせることができた。

本の有無が確認できたところで、新刊の購入計画を立てた。本校では、日本からの一括購入を年2回(半期に一度)行っていたため、2015年度後期分と2016年度前期分に分けて不足分の推薦図書を補うこととした。現在では、ほぼすべての推薦図書を配架することができている。また、関連本の新規購入を同時に進めたことによって、各教科での学校図書室の活用が盛んに行われるようになってきている。

ウ 読書スペースとコーナーの工夫

児童生徒に多様な読書環境を提供したいと考え、従前のテーブル・イスの閲覧スペースに加え「ちゃぶ台スペース」「座椅子スペース」「マットスペース」を新たに設けることにした。本棚に囲まれたちゃぶ台スペースは、秘密基地のような感覚を味わうことができると小学部にも中学部にも大人気となった。座椅子スペースは少しの時間でも気軽に使用することができ、壁にもたれて読むスタイルは小学部高学年のお気に入りとなった。マットスペースでは寝転がることもでき、小学部低・中学年がゆったりと本に向き合う姿を見かけるようになった。



ガラス張りの壁を利用した本の紹介コーナー

また、掲示板の隙間を活用した新刊コーナー、書架上のスペースを利用した漢字検定コーナー、ガラス張りの壁を活用した本の紹介コーナー、NIE (Newspaper in Education) を意識した新聞コーナー等の設置は、児童生徒を豊かな本の世界へと導いていくための一助となった。

④保護者ボランティアとの連携

学校図書館改造プロジェクトにおいて、最も大きな原動力となったもの。それは、保護者による図書ボランティアの活動である。新刊が入るたびにカバーリングを行ってくれた方、本が破損するたびに修理を行ってくれた方、日本の四季や年中行事を伝えるための掲示を考えて飾り付けを行ってくれた方、各学級で定期的に読み聞かせを行ってくれた方、図書ボランティアの協力なくして、このプロジェクトの成功はありえなかったであろう。この活動に賛同し、協力してくれたたくさんの保護者の皆さんに、心から感謝の気持ちを伝えたい。

4. おわりに

多様な図書館整備への取り組みを通して、学校図書館が「単なる本置き場」から「主体的に読書活動をする場」へと変わった。児童生徒は気軽に学校図書館を訪れるようになり、読みたい本や調べ学習に活用できる本を見つけ出せるようになった。本を借りて読むことが大きな喜びとなり、学校図書館が児童生徒でにぎわっている。小学部では、お弁当後の昼読書の取り組みも始まった。

私たち教師は多くの使命を帯びている。その中でも最も重要な使命の1つが、一人ひとりの児童生徒に確かな学力をつけさせていくことである。その学力の根幹にあるものが言葉の力であり、あらゆる教科・領域の学びを支える力である。したがって、その言葉の力を育てていくことこそが思考力・判断力・表現力を伸長させることにつながり、教室での学びを超えて、この時代を生き抜いていくために必要不可欠な「生きる力」を育成していくことにつながっていくのではないだろうか。

自分の考えを話したくてたまらない。友だちの考えが聞きたくてたまらない。目の前にいるすべての子どもたちに豊かな日本語力を身に付けさせ、自らの考えを自在に表現できる学級や学年を、そして学校をつくっていききたい。その夢の実現のためには、日々の授業づくりに加えて読書活動の推進も欠かせないのである。

学校図書館と授業とをつなぎ目的をもって読書する児童生徒の育成を目指して、今よりも少しでも必要とされ価値ある学校図書館づくりを目指して、今後もさらなる改善に向けて歩みを続けていってほしい。この研究を進めるにあたって、各活動に熱意をもって取り組んだ本校職員と保護者ボランティアの方々に心より敬意を表し、研究のまとめとする。

プロジェクトによる変容

	改造前（2014年10月～2015年3月）	改造後（2015年10月～2016年3月）
利 用 人 数	平均16人／日	平均103人／日
貸 出 冊 数	平均318冊／月	平均782冊／月
蔵 書 数	約4000冊	約5700冊
授業等での活用	・総合的な学習の時間のみの活用だった。	・総合的な学習の時間の他にも、国語科・社会科・理科・生活科・図工美術科・外国語の学習でも活用されるようになった。
児童生徒の様子	・本の貸し借りや調べ学習以外での来館はなかった。	・学校図書館との距離が近くなり、気軽に立ち寄れる部屋となった。 ・短時間で読みたい本を決めて、借りることができるようになった。 ・学校図書館が異学年交流の場となった。
教職員の様子	・学校図書館を訪れる教職員はほとんどいなかった。	・児童生徒への読書習慣の確立を目指した声掛けが増えた。 ・休み時間には、児童と一緒に学校図書館を利用するようになった。 ・学校図書館内で授業を行うようになった。 ・読書活動に関連した授業を行うようになり、完成作品を図書館付近に展示するようになった。